

研究概要

1. 研究名称 または課題名テーマ等

拘縮を伴う腱板断裂における鏡視下腱板修復術後成績に關与する術前因子の検討
-後ろ向き研究-

2. 研究責任者(当院)

所属： リハビリテーション室

氏名：小川侑男

共同研究の場合は代表機関 及び 代表者名

機関名：なし

代表名：なし

3. 分担研究者

所属：整形外科

氏名：伊勢昇平

所属：リハビリテーション室

氏名：奥村太朗、廣田知佐恵、桑原康太、白井智裕

4. 研究対象者

2020 年 6 月 1 日～2023 年 3 月 31 日の間に聖隷佐倉市民病院において

腱板断裂に対して鏡視下腱板修復術を受けた方

5. 研究の必要性

腱板断裂に対し、鏡視下腱板修復術を施行することにより、良好な術後成績が多数報告されている。また、術前肩関節拘縮を伴う腱板断裂に対して鏡視下腱板修復術にマニピュレーションや全周性関節包切離術の併用により良好な成績が多数報告されている。一方、一部の症例では不良な術後成績が報告されている。臨床場面においても、一部の症例で疼痛遷延化や肩関節可動域制限が残存し、術後リハビリテーションに難渋することを経験する。鏡視下腱板修復術後の成績不良因子として、術前肩関節拘縮が報告されており、術前から肩関節機能を把握することが重要である。

以上のことから、拘縮を伴う腱板断裂症例を対象とした術前因子と術後成績の関係を検討することで、良好な術後成績の獲得に必要な術前因子を特定することが可能となり、術後の予後予測や良質な術後リハビリテーションの提供に繋げることが出来ると考えられる。

6. 研究等によって生ずる個人への影響と医学上の貢献の予測

後ろ向きコホート研究であり、日常診療にて収集した情報のみを使用するため、本研究によって生じる個人への影響はないと考えられる。

今回の検討による医学上の貢献の予測としては、良好な術後成績を獲得するための術前因子を明確にすることで、術後の良好な肩関節可動域の獲得に繋げることができ、術後成績が向上する可能性がある。また、リハビリスタッフにおいても具体的な数値で示すことでリハビリテーションのリスク管理や質向上の一助となると考えられる。

7. 対象者、関係者等からの問合せ先(当院)

連絡先番号：043-486-1151（代表）

担当者氏名：小川侑男

対応時間：8:30－17:00